

河合春近用水

河合春近用水は宝暦3年(1753年)の開削と言われており、十郷大堰の下流約3kmの坪内水閘から取水され、森田、河合、春江など42の村、約1,300haを潤す大用水でした。

当時の九頭竜川は、十郷大堰の下流で旧五領ヶ島を囲むように、表川と裏川とに分かれており、坪内水閘は流量の少ない裏川に設けられていました。

河合春近用水は、いわゆる十郷大堰の“漏れ水”でした。

裏川の水量を増やすため、河合春近用水流域住民の負担で斜堰を設けて水を裏川に導いたのでした。



これは、水の確保が命の確保に直結していた当時では、十郷大堰の“漏れ水”をいかに効果的に取水するかということに心血を注いだ結果であったと言えるでしょう。

水量が少ないうえに、用水路は屈曲していたため、漏水や越水も各所で発生しました。

また、少ない水を数多くの村々へ配水していたので、川幅や水路勾配、護岸の高低、川柳の繁茂などが各村々への水量に微妙に影響しました。

河合春近用水流域住民の大切な水を無駄にしない情熱は、しばしば対立を生み出し、下流の村々の間では、幾度となく激しい水紛争が起こりました。

その度に、粘り強い話し合いが行われ、時には福井藩役所や江戸評定書の裁定を仰ぐこともありました。

現在の穏やかで豊かな水の流れは、そうした人々の様々な思いが込められているのです。